

これには、指導員だけでなく、役場、佐久病院の担当者の手記も同時に掲載されているが、自主的にこのような手記集がまとめられたのは衛生指導員会では初めてで、それだけ任期中に出来事が多かったのだといえよう。

その中で、高見沢さんはこれからの指導員活動として、次のように述べている。

「やはり、基本は住民の意思を大事にし、住民の意見をどんどん把握して進めていかなければならないのではないだろうか。それには私たち指導員が各担当地区で、住民の要望によって定期的に会合を持ったり、学習会を開いたりして、住民の本当の、末端からの意見を聞いて、行政や医療機関へ上げていって、いい意味での住民主体の健康管理活動をしていかなければならないのではないかと。」

また井出正さんは、「現在進められている健康管理事業は、まだ住民の主体的な取り組みになっていない。毎日放送されている有線放送を聞き流していたり、配布されているチラシを読んでいる人も多いのではないかと。行政、病院まかせに進んでいるのが今の実態であると思う。そうであるならば、地域内での指導員の活動が重要なポイントになってくる」と反省している。その他、各指導員たちの日常活動を通しての八千穂村への切々たる思いが、この小冊子に見事にまとめられている。

## ちやつかり、巡回芸者、に

だが、苦しく、つらかった日常の取り組みも、後になってみれば楽しい思い出だけが心に残るものだ。この小冊子には、四年間の良き思い出も数多く語られている。指導員としていちばん楽しかったのは、やはり演劇への取り組みと研修旅行であったという。

杉本末吉さんは、この期間中「健康まつり」の演劇には三回出演し、その渋い演技はいつも好評だったが、とても良い思い出になったという。また研修旅行については、「岩手県沢内村への研修旅行に参加して、先人たちの苦勞を知ったり、岐阜県上矢作病院を訪れてその活動を学んだことはとても勉強になった。また毎年の忘年会、新年会、夏のビール大会も楽しい行事だった。四年間を振り返ってみると、苦勞より楽しみが多くあった」と述べている。

研修旅行にいちばん心をくだき熱心だったのは、実はかつて「指導員をなくす」と言った役場の衛生係だった。観光だけでなく、もっと研修をやらなければいけないと、バス代を村で負担するよう予算をとってくれた。これはとても有難かったと高見沢さんは言う。それまではすべて自己負担だったのである。

研修旅行には、役場や病院の担当者もいっしょに参加し、夜は大いに飲みあった。これが、お互いの感情のもつれの修復にも役立ったのはいうまでもない。

衛生指導員会ではよく酒を飲んだ。酒は活動の源泉であった。当時、村保健婦の竹内敦子さ

んは、「最初はなぜこんなに佐久の男たちはお酒を飲むのだろうと思いましたが、恐ろしいことにだんだん自分も染まってきて、いまや宴会がなければ何か物足りないような気さえます」と語っている。

またかつては酒の付き合いはいつも憂鬱のほうだったという病院八千穂担当の征矢野(旧姓・小須田)文恵保健婦は、「おかげ様で、何かがあった後は決まって酒が出てくる佐久病院気質にすっかり染められ、今や片手におちようし、片手にマイクのちゃっかり巡回芸者(?)になりすましています。人々とかかわりの中で、自分はいろいろな面で成長させられてきているんだなあと改めて感じています」と記している。

一方では、得ることも大きなものがあつた四年間だったともいえよう。苦しくも楽しかった四年間がこうして終わった。

## 激動の嵐は健康管理部にも

### 「つごん会」廃止の提案

「激動の四年間」は衛生指導員だけに限らなかつた。ちょうど同じ頃、健診を担当していた

佐久病院健康管理部にも、激動の嵐が吹き荒れたのである。といつても衛生指導員のそれとは直接の関係はない。健康管理部の激動の嵐は、「うどん会」が発端だった。

当時、八千穂村の年に一回の健康診断は、二十三もある各区を回って行われていた。当時は勤め人も多くなっていたので、その人たちの受診の便宜をはかるために、受け付けは午後六時ごろまで延長していた。従って健診が終わるのは大体午後七時ごろになる。

その後で、衛生指導員や区の役員、婦人会、役場の担当者、病院の健診スタッフなどが、健診の反省会をかねて、いっしょにうどんを食べ、一杯やりながら交流会を持っていた。これが健診後の「うどん会」である。そこは時として村民の「本音」が出る場でもあった。それだけに話はずみ、つい遅くなることも多かった。

事の起りはこうである。

昭和六十一年の十一月に開かれた佐久病院と八千穂村との健康管理に関する合同会議で、病院保健婦が、恒例になっていた「うどん会」をやるのは止めたらどうかと提案したのである。その理由は、「うどんをつくるために、区の婦人会の人たちは、その準備や後片付けも含めて、夜遅くまで大変ご苦労している。その負担をできるだけ減らしたい」というものであった。

そのときはあまり議論はなかったのだが、衛生指導員たちも区の役員も、区の負担がそれほど大きいとは思っていなかった。

後で高見沢さんが、こう述べている。「それほど大変ということもなかったね。まあ年中行事のようなもので、それぞれの役が回ってくれば、今日はお手伝いに行く日だということ、交代でやっていたから。それに費用は村から出ていたし。大事なのは、病院の先生方や健診班の人といっしょに話し合えることだね。婦人会の人、ふだん疑問に思っている病気のことなど、いろいろ聞くチャンスだものね」と。区にとっては、健診後のうどん会は楽しみにしていた面もあったのだ。

### 若月院長大いに怒る

若月院長（当時）は、合同会議でじっとそのことを聞いていたが、その場では黙っていた。村長以下、村の人も多数出席していたので遠慮していたふしもある。しかし、数日後、足取りも荒々しく、健康管理部へ現れた。

室内をさっと一瞥したのち、奥のコーナりのテーブルに陣取るや否や、「幹部たちはここへ集まれ」と呼び寄せた。松島部長、元木課長、横山保健婦長（いずれも当時）が三人並んでその前に坐る。当時主任だった飯島郁夫さんは、どうしたらよいかとモジモジしていると、「君もそこへ坐れ」と一緒に坐らされた。

そして開口一番、「何だ、この間の提案は！　これで健康管理部もダメになった。運動精神

がなくなつた。君たちはとうとう健診屋になりさがつたか」と大声でどなりつけた。同じ部屋にいた他のスタッフも一瞬びっくりして顔を上げる。若月院長は、保健婦の提案の本音が婦人会のことよりも、「うどん会」をやると保健婦自身夜遅くなつてとてもつらいからだということ、すでに見抜いていたのだった。

たしかに、地区にとっては年に一度のことかもしれないが、病院や役場の保健婦は健診の三カ月の間、毎晩夜遅くまで出なければいけないということがある。だが「うどん会」は、住民といろいろ話し合えるまたとないチャンスだ。それを切り捨てるなどというのは、運動精神はどこへ行ったのかというのである。

次第に巡回健診に慣れてきた職員には、できるだけ「合理的に」仕事を済ませて、面倒なことを起こさないで過ごすという風潮も一部生まれていた。健診が終わればできるだけ早く帰りたいと考えている職員もいではなかった。その官僚化を若月院長は叱つたのであった。

「お前たちの目は死んでいる」

若月院長の健康管理部に対する批判は、その日だけにとどまらなかつた。あらゆる機会を通じて行われていった。

ある日の監査の講評の席で、病院幹部が四、五十人集まっている前で、たまたまそこに出

ていた飯島郁夫さんは若月院長から一喝された。「君たち健康管理部はなんだ。すっかり官僚化して健診屋になってしまったじゃないか」。出席者も監事もびっくりして若月院長の方を見る。「そんなことで健康管理が出来ると思うか」と、若月院長の叱責は止まることを知らなかった。監査の講評が終わってからもお、それは続いた。漸く終わったのは夜十一時を過ぎていた。そういうこともあって健康管理部では、六十二年から毎年若月院長に年のはじめに、健康管理の取り組みについて講話をしてもらうことを決めたのだが、その席でも毎年、健康管理部に対する批判は続いた。

平成四年の途中で健康管理部に入り、平成五年の年頭挨拶に初めて出た井出真一さんは、若月院長がその集まりで、まず最初に「お前たちの目は死んでいる。やる気があるのか！」と言われたので、度肝を抜かれたという。若月院長の批判は少なくとも数年は続いたのであった。

しかし「うどん会」は実際はやめることはなかった。それは、人間ドックと集団健診受診が一年おきとなり、健診会場が各区の公民館から、村福祉センターに移行して行われるようになった平成八年までは続いたのである。

VII

セミナーと地区ブロック活動



住民への「健康アンケート」に取りくむ衛生指導員たち



## 指導員たちとセミナーをつくる

皆が出れる学習の場が欲しい

前にも述べたように、四年間の任期を終えて、平成元年から衛生指導員十三人のうち十人が交代した。高見沢佳秀さんはもう一期続けることにしたが、会長は指導員三期目の渡辺憲太郎さんがやることになった。

渡辺さんは、前記の小冊子の中で、「衛生指導員の大事な仕事は村民との対話と教育だと思う。それには、保健・衛生・医療面での学習会も月に一回は持たないと無理である」と、学習会の大切さを訴えている。

衛生指導員会は、従来から佐久病院の協力を得て、月一回の学習会をやっていたのだが、激動の四年間の中でその開催も滞りがちになっていた。指導員OBからも、指導員を辞めていけばんさびしいことは、学習会に出られなくなることで、何とかOBも含めて皆が出れるような学習の場が欲しいという声も出ていた。

それより少し前、昭和六十二年に小諸厚生総合病院で行われた保健担当者の意見交換会に出た健康管理部課長代理（当時）の飯島郁夫さんは、思わぬ話を聞いて目が覚める思いがした。

小諸厚生病院では、健康管理課長（当時）だった依田発夫さんらが中心となり、すでに昭和五十八年から「実践保健大学」という講座を始めており、その卒業生たちが町村単位で、デイサービス施設をつくる住民運動の中心となって活動していることを知ったのだった。

興奮した飯島さんは病院に飛んで帰り、保健婦の小林栄子さんや中沢あけみさんたち、職場の何人かに呼びかけた。「俺たちもやろう。住民参加の健康管理を実現するには、まず住民のリーダーづくりからやればいいんじゃないか。よくよく考えてみれば、佐久病院には八千穂村の衛生指導員という立派なモデルをつくった歴史がある。それを佐久地域に広げようではないか」と。

### 指導員が中心となって

実は地域の保健活動家を養成するための保健大学を初めてつくったのは、群馬県の利根医療生協の「生協保健大学」であった。こちらは昭和四十九年から開かれており、多くの卒業生が活動している。

後になって、利根医療生協の木村朝次郎専務さんから、「モデルは八千穂村の衛生指導員にあったのですよ」と言われて飯島さんは驚いた。「やっぱり八千穂村が原点だったんだ」と。

早速、健康管理部の主任者会議で、飯島さんはこのことを提案した。みな一も二もなく賛成であった。ただ上手くいくかどうか分からないのに、名前だけ「大学」とつけてもどうなの

かという意見もあって、当面は「地域保健セミナー」ということで始めようということになった。

飯島さんは、指導員の高見沢さんにこの話を持ちかけた。この実施には衛生指導員が中心となって活躍してほしいと考えていたからである。

高見沢さんも「指導員会で月一回行っている学習会を、佐久地域の人たちといっしょにやって、いろいろな意見を聞いてみたい」と大賛成であった。そして衛生指導員たちやそのＯＢの中に賛同者を拡げていった。

早速カリキュラムづくりが始まる。小林栄子保健婦は、休みの日を利用してひそかに東京通いを始めた。関係しそうな講座を探し、自費で片端から受講していった。

小林さんはこう述懐する。「保健婦仲間で、いろいろな向上したいと議論が多い中で、何をやっていいか分からないモヤモヤした気分を持っていて、苦しい時だった。このセミナーの取組みは、自分にとっても救いになった」と。

カリキュラムづくりといっても暗中模索である。担当者を決め、農村保健研修センターへ泊まり込みで案を練った。単なる医学講座ではなく、リーダーとして地域で活動するための理念と実践方法も取り入れた。また一方的な講義ではなく、グループワーク、実習をできるだけ取り入れ、また演劇上演は必ず入れることを決めた。

漸くカリキュラム案ができ、飯島さんは勇んで、企画案を持って若月院長に病院として実施の許可を願うに行った。

ところが若月院長から、「今の君たちにそんなことができるのかね」と一喝されてしまった。自ら健診屋と批判した健康管理部の若造たちが考えたことを、若月院長はまだ信用していなかったのだ。

### 思わず全身がふるえた

困った飯島さんは、高見沢さんに訳を話す。ちょうど八千穂村と佐久病院の合同会議が開かれていて高見沢さんも出席していた。高見沢さんはセミナーに期待を持っていたので、「よし、住民の立場から話してみよう」と、休憩時に若月院長をつかまえ話かけた。

「俺たちも佐久の他の地区の人たちと、指導員会でやっているような学習をいっしょにやってみたい。いろいろな人の意見を聞いて交流してみたい。とくに他の町村でどんな取り組みをやっているか知りたい」と訴えた。

若月院長は黙って耳を傾けていたが、「みなさんが勉強したいという気持ちはとても大切だね」と答えた。そのとき、若月院長の目がキラリと光ったのを高見沢さんは見逃さなかった。まるで自分の心を見透かされているようで、とても恐ろしかったと回想している。

セミナーはすぐには実現しなかった。スタッフもさらに内容の検討を重ねた。

村の「健康まつり」に、健康管理部の担当者や衛生指導員たちが熱心に取り組んでいる様を見て、これなら大丈夫だろうと若月院長は判断したのであろう。一年経って漸く許可が出た。

最終的に若月院長の「よし！ やろう」の一言があったとき、飯島さんは思わず全身がふるえたという。

## 地域活動の推進役はセミナー同窓会

「劇は俺たちがやるぜ」

時期が少し遅れたが、平成二年二月十日に第一期の佐久地域保健セミナーが開講した。

このセミナーには十回の講座が組まれていて、一カ月に二回の割りで進められるが、受けやすいように土曜日の午後の時間帯が当てられている。定員は三十人のところ、第一期には三十九人も応募があった。

衛生指導員会では、毎年数人が交代で参加することを決めていたので、今回は現役から会長渡辺憲太郎さんを先頭に、高見沢佳秀、岩崎正孝、杉本末吉のみなさんとOB会会長の井出

佐千雄さんの五人が参加した。

参加者の大半は「A女性部と町村の保健指導員の現役、または役を終えた人たちだった。

保健指導員は任期は二年だが、それで交代してしまうのは、町村の保健婦にとっても残念だし、指導員さん自身も寂しいという声があり、なんとか勉強を続けたいということでも多く応募があったようである。この点では衛生指導員も同じ思いであった。

このカリキュラムの特徴の一つは演劇の上演があることである。しかも開講第一日に組まれている。

当初は都合で、衛生指導員が健康まつりで上演した「看る」をビデオで見る予定だったが、「それじゃ、おもしろくねえな。俺たちが上演しよう」と、指導員たちが劇の上演を買って出た。

もちろん受講生の五人だけでは出来ない。今回は受講しなかった他の指導員も全員応援に駆けつけた。舞台装置をつくるのはお手のもの。指導員の熱演は、初めての受講生には大きなショックと感動を与えたようだった。

女性の受講者からは、「高齢化が進む現代社会の様相を目の当たりに見る思いで、じっと涙の伝わる頬を押さえながら見入った」とか「どこにもあり得る話で、わが家も全く同じく泣かされたことを思い出し、涙がポロポロでした」とかの感想が寄せられた。

この劇は、毎回のカリキュラムに入っていて、第二期のセミナーには、第一期の卒業生が上

演することになった。そして第三期には第二期の卒業生が上演するというふうには、順に受け継がれていった。現在では、セミナー同窓会の演劇班が上演している。受講生同士のすばらしいつながりであった。

### 卒業後は同窓会を結成

セミナーは、大成功であった。劇をはじめ、各講座における衛生指導員の言動はみんなの注目を浴びた。ある婦人の受講者からは、「八千穂村の衛生指導員のみなさんの活動の一部を聞かせていただき、地域に根ざして積極的に取り組んでおられる姿に感心した」との声が寄せられた。

またJAのある生活担当者は、「住む場所、組織等、いろいろ違いはあろうとも、問題意識を同じくする人同士が手をつなぎ合うことができたことは、何物にも勝る。これからの地域づくりの力になり得るのではないだろうか」と述べている。

最後の旅立ち交流会の席で、受講生はこのまま別れるのは惜しい、何か集まりを持ちたいという雰囲気になっていた。そのとき、佐久市の坂口光邦さん（元教員）が立ち上がり、「同窓会をつくろうじゃないか。会長には八千穂村の高見沢さん」という提案をされた。

もちろん満場一致でこの提案は承認され、第一期生の同窓会が発足した。第二期、第三期と

卒業生が増えるにつれて、これはやがて、全体の「セミナー同窓会」として発展することになる。

平成三年六月、第一期卒業生の補講が行われたとき、高見沢会長はじめ参加者の提案により、同窓会に食と環境班、高齢化社会班、演劇班、機関紙班の四つの班が結成され、地域での「班活動」が始まることになった。

### 種をまく人になろう

指導員の岩崎正孝さんは、食と環境班の班長になったが、地区を廻っての料理講習会の他に、毎年六月には千曲川環境ウォッチングをやることを決めた。

岩崎さんはこう語る。「川上村川端<sup>かわは</sup>下の水はきれいで冷たかったねえ。それに比べると、白田の水は汚かった。川がドロドロしていて、とてもこの中に手が突っ込めるかという感じだった」と。現在では、子どもたちもいっしょに参加している。

演劇班の班長になった指導員の青木秀夫さんは、第二期の受講生である。地区の要請であちこち劇を上演して歩いた。佐久地区だけでなく、隣の山梨県のある町からも頼まれて三百人を前に上演したこともあるが、いちばん印象に残っているのは、八千穂村の二十世帯しかない「うその口」区で劇をやったときだという。



小さな公民館で、ほんとに膝つきあわせての上演だったが、みんな涙を流して夢中で観てくれた。「若月先生が劇を始めたときは、おそらくこんなふうだったんだなあ」と思ったら、胸が一杯になったという。

そのほかに第三期卒業直前に、市町村単位での「支部活動」も始まった。同じ地区同士の取り組みだが、これには各町村の保健婦さんたちも積極的に支援してくれた。八千穂村の支部長には指導員OBの井出左千雄さんが推された。

かくして同窓会の主な活動は三つになった。一つは会全体としての取り組み、二つは共通の関心を持った人たちでつくられた班活動（後に音楽班が加わる）、三つは市町村単位での支部活動である。その共通のスローガンは「種をまく人になろう」である。

この同窓会活動は次第に佐久地域に根づきつつあるが、そのルーツは、あり方や生い立ちも含めて、間違いなく八千穂村衛生指導員にあったのである。二十二年度末には、同窓会員は合わせて三八九人（うち男性四十七人）になった。

（この地域保健セミナーは、これと平行して行われてきた「お年寄りのケアセミナー」と平成十五年に統合し、あらたに「佐久地域保健福祉大学」が発足した）。

## 女性推進員とともに手を組んで

### 地区ブロック会をつくる

衛生指導員たちは、ときには各市町村の保健補導員や保健推進員たちの集まりに出席することもあり、ともに学び、ともに討論してきて、女性たちといっしょに保健活動をすすめることの必要性を感じていた。

だが八千穂村の健康管理はというと、健診の受診勧誘とか希望者の取りまとめなど、実際的な仕事はすべて女性の健康づくり推進員の手に移っていて、指導員の活動は宙に浮いてしまっている。

一方、新しい指導員規約の中では、衛生指導員は健康管理の中でリーダーシップをとることと書かれてある。どうリーダーシップをとったらよいのかが課題だった。

昭和六十三年に新しく衛生係になった須田秀俊さんも、そのことで悩んでいた。

役場の中では、同じ仕事をする組織が二つもあっては無駄だから、一本化してはどうかという意見も多くある。何とかして地域の中で衛生指導員がリーダーシップを発揮できる場をつくらなければいけない。それには衛生指導員を「親方」にすることだ、すなわち責任を持ってやっ

てもらおう場をつくることだと須田さんは考えた。そこで出来たのが「地区ブロック会」である。まず十四人の衛生指導員の担当地区を中心に、全村を十四のブロックに分ける。それにブロックから出ている四十二名の女性の推進員をそれぞれ二―五名づつ割り当てる。各ブロックの指導員をリーダーにして、地区ごとに活動するというものである。

衛生指導員は演劇活動はさかんにやっていて、これも大きな地域活動の場であった。だが、積極的に参加している人たちはよいが、そうでない人は自分の活動の場がない。演劇の主役からはずれた人は、いつのまにか地域活動からも遠のいてしまう。今度は一人ひとりを主役にするというのである。

一方、女性の健康づくり推進員も、ただ役場の下請け仕事だけでは面白くない。仕事量はかなり多く、中にはとても出来ないから辞めたいという人も出ている。逆にもっと学習したいという声も大きい。衛生指導員と一緒にやることは願ってもないことだ。「地区ブロック会」は、その二つの組織を上手く組み合わせた地区活動のしくみであった。

### 自分たちの好きなテーマで

平成元年からブロック会が始まる。ブロックごとにやる活動は、同じ地域なので集まりやすい。その上三人の保健婦が各ブロックを分担して指導や相談に当たった。さらに会議には、役